

益子町の陶芸の歴史的展開の調査・研究

ー伝統と外国人陶芸家の役割

事業代表者 国際学部准教授 バーバラ・モリソン

構成員 国際学部准教授 出羽 尚

モリソン翻訳文学論履修学生およびモリソン・ゼミ学生

1. 事業の目的・意義

本事業は、宇都宮大学中期目標の I-3-(1)、(2)、(3)「地域を志向した教育・研究」・「社会との連携や社会貢献」・「地域の国際化への貢献」および I-1-(3)「学生への支援に関する目標」と関連を有する。

益子町の陶芸の歴史的展開および外国への紹介において一定の役割を果たしたと考えられる外国人陶芸家の活動、および今後の益子町の観光振興とまちづくりのアイデアをグローバルな視点から調査研究する。

この取組は益子町の教育委員会と連携したプロジェクトとして企画された。その際、アクティヴ・ラーニングの授業科目の一環としてモリソン担当の授業であるところの「翻訳文化論」と「卒業研究」の学生の参加を前提した。また、芸術文化が専門の出羽教員の協力を得ることとした。

2. 研究方法（又は事業内容）

(1) フィールド・ワークの実施

モリソン指導下、学生たちは2度にわたり益子町を視察した。第一回目は2015年12月17日に実施された。「濱田庄司記念益子参考館」を訪問し、益子町の概要と歴史、産業等について「益子町観光協会」の人々から説明を受け把握した。

そのあと、益子陶芸をはじめ、町の歴史、伝統文化、自然、宿泊施設、食にかかり、学生たちの目に映った風景・情景をカメラで撮影し、協会の案内において記録に留めることをした。

益子町の人々との議論において、学生たちは彼らが国際学部学生に何を一番期待しているのかを確認することから始めた。その結果、益子町全体の価値ある資源を学生の視点から発掘し、それを日本全国や世界に発信することによって「陶芸の

町」としての益子ばかりでなく、伝統と歴史に培われた町の「文化と自然」を発信することであることを、学生たちは理解した。

第二回目は、2016年1月24日に実施。「益子中央公民館」にて、予め学生たちが作ったPPTを参考に益子町の人たちと、いわゆる「売り」(PRすべき部分)についていかに発信するか議論を行い、その具体化に向けて双方で努力することとした。

なお、継続的にメール等で意見交換を通じて完成したのがスライド13枚のPPTによるまとめである。



(フィールド・ワークの風景)

3. 事業の進捗状況

国際学部はミッション再定義において「地域の課題解決・文化の発展に組織的に協力する」ことを確認している。

この意味で、益子のまちづくりを考えた場合、栃木県の重要な産業である陶芸が中心に考慮されることは当然であるが、その他の伝統文化であるところの藍染や建具等の民芸、祭り等の伝統文化、四季折々の自然環境、そばやいちご、料理等の食文化などにも注意を払い、総合的に分析・研究・考察・提言されるべきであることが、特に二度に

わたり当地を視察した学生たちの報告から明らかになった。

そして、それらを益子町固有の芸術文化として、益子町の人々の日常のや暮らしとともに SNS 等を媒介として、日本だけでなく世界に情報発信・紹介する取組を実施していくことが必要であるとの結論に至った。

益子町教育委員会の紹介により、益子町観光協会、濱田庄司記念館益子参考館を訪問し、益子町の現状を課題・問題・アピール箇所も含め把握することにおいて、学生たちはその基本的プランを立てることができた。

4. 事業の成果

学生たちは益子町の歴史、文化、伝統、さらに人々に触れることができたことばかりでなく、町が現在、抱えている問題・課題についても理解した。また、これら課題について、いかに解決すべきかを、学生たちが町の人々とともに議論し、それを PPT にまとめ上げることができたことは、アクティヴ・ラーニングという授業形態が有する利点であり、またこの取組が大きな成果を上げることができた要因であると考えられる。

5. 今後の展望と課題

課題は大きく 3 点あげることができる。第一は益子町の「売り」の周知方法である。アイデアとしては、メディア（新聞・テレビ）と益子町HP の充実・活用であった。

第二は、益子町を訪れる人のための宿泊施設の確保である。たとえば、イベント等が朝から夕方に及ぶ場合、あるいは夜のイベントの場合、観光客は当然益子町に宿泊することになる。しかし、現実にはホテル・旅館は一、二軒に過ぎず、ないに等しい状態である。人がやってくることは、町に活気をもたらす。現在、日本に外国人観光客が増加し、ホテルが足りない状況で、計画されているのが「民泊」である。益子の場合「民泊」ならぬ「民宿」、それも農家での「民宿」ならば、自然

や「食」にも親しむことができる。また、地域のひととのコミュニケーションにより、より益子町についての理解が進む。また、口コミによるピアー効果効果が大いではないか、との建設的意見が学生たちから出されたことは興味深い。

第三は、交通の便があまりよくないことである。宇都宮駅からのバスは、1 時間に 1 本程度、また JR 真岡線利用の場合は、乗り換えが必要である。一方、自動車の場合は、陶器市の際に見られるように道路は大渋滞となり、駐車場も満杯となる。いかに、駐車場を確保するか。また、交通渋滞を招かないようにするか。



(学生と町民との意見交換の風景)

6 今後の計画

本年度に、学生が実施した益子町への訪問、住民との面接、および調査を踏まえて、益子町の文化の広報や観光振興に関わるイベントやワークショップ等を町当局や町民との協力によって具体的に計画・実行する予定である。

このため、平成 28 年度の前期に参加学生を再度募るとともに、学生たちと益子町教育委員会や観光協会との実りある議論を通して、予算の範囲内にて実現性ある総合的イベントを企画し、後期に実施することが目標である。

その考慮されるべき一つは、宇都宮からの観光客を増やすことである。宇都宮一益子、日光一益子というような栃木県における滞在型観光の形を作りあげることが、より身近な課題として挙げられる。